墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（二）-初編下帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18133

明治大学教養論集　通巻五一五号（二〇一六・三）一〇七―一三七頁

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（二）――初編下帙――

神田正行

凡例

一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。

一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。

一、原本との対照を容易にするため、合印（あいじるし）（文章を読む順序を示した記号）をも翻刻するが、多くは形の近い記号で代用した。

一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を行った。

一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。

一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三国志』の相当する人物を【　】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。

一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館（江戸文芸文庫）蔵本を用いた。

《第三冊　表紙》

傾城三国志初編　下帙巻之上
庚寅新刊
関羽【▼駒絵内。中央は関路】
雪麿作　国貞画
喜鶴堂梓

《第三冊　前表紙見返し》

傾城三国志
毎編八巻　下帙上巻
呉魏蜀
庚寅新鐫　喜雀堂行

（五）

四の巻より こゝに又大嵩【皇甫嵩】・朱根【朱儁】らは、賊婦梁【張梁】・七宝【張宝】と、挑み戦ふこと数多度に及びぬれば、賊徒の勢は戦ひ負けて、風の森【長社】といふところに引退き、木立茂りて草深きところを見立てて柵結ひ回し、寨を構へて立て籠れば、大嵩はひと手の勢に、投げ松明を用意させ、言ひ含めて忍びやかに、敵の後ろに回しつゝ、その夜二更の頃ほひに、

（21丁表　滝夜叉登場）

四方よりおつ取り囲み、一度に火をかけ鬨を作りて、責め立つる程こそあれ、不思議や、風の森と呼ぶ名によるものか、風起こりて火炎天を焦がせる如し。かゝりければ賊徒の勢は、上を下へと騒ぎ立ち、肌背の馬に◆○／◆○跨がるあれば、弦なき弓に矢をつがへんと、焦る者も多くあり。「鎗よ、長刀よ」と呼ばはるのみにて、取る物も取りあへず、みな十方に散乱して、歯向かふ者はなかりけり。梁・七宝右へ／左より姉妹も、辛うじて身を逃れ、足に任して逃げ走る。

かゝる所に向かふより、ひと群れの女軍現れたり。皆一様に紅の衣にて、悉く抹額しつゝ、同じ紅の襷をかけ、さも由々しげにいでたつ大勢、先に進みし女武者は、此手の大将なりけるが、年いと若き下へ／中より手弱女の、顔ばせ極めて美しきが、丈なる髪を振り乱し、小具足に身を固めたり。胸のたくりやう【「たんりやう（胆量）」の誤であろう】人に越え、謀衆に過ぎて、剣法・兵法をも兼ね備へ、弓術・馬術にも鍛練して、をさ〳〵大丈夫に劣らぬ武者振り、こはそのかみ桓武天皇の三代、

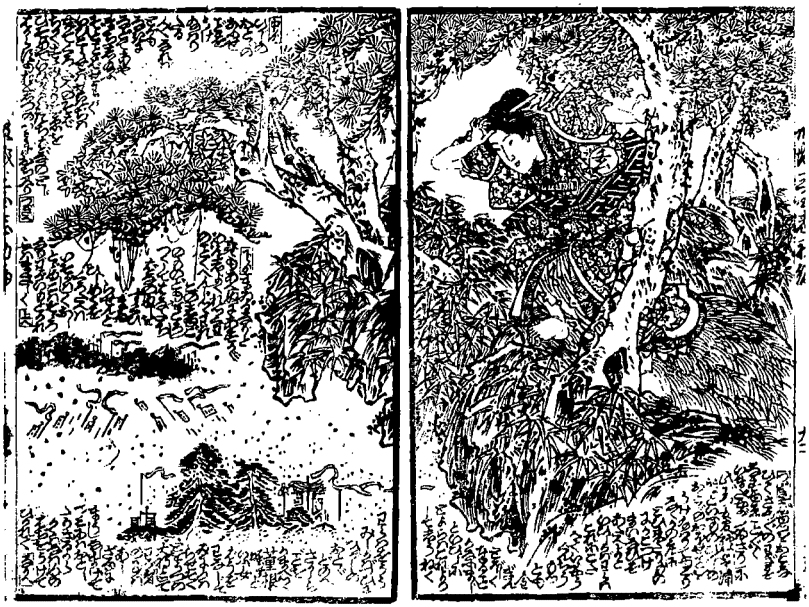
鎮守府将軍、平の良将の嫡男、滝口新蔵人、相馬の将門が妹にて、滝夜叉姫【曹操】と呼ばれつゝ、下総の国猿島の郡、石井の村に人となり、深窓に養はれしかども、生得豪気の姫なれば、此度次へ続く（21オ）／黄巾の賊婦芒角【張角】ら、姉妹の者を討ち破らんと、おのが手勢を従へつゝ、当国に馳せ上り、今かく賊徒が敗軍する、あはよき場所へいで会ふて、逃げ来る賊婦の道を遮り、討ち取る首数三百余り、馬物の具を奪ひ取り、追ひ討ちの働きすぐれたり。

かくて滝夜叉姫は、大嵩・朱根に名対面して、始終の様子を物語り、彼らと共にひと手になりて、ひとまづ国見山の麓なる、寨に息をつきゐたり。

かゝる所に、大桑の玄妙【劉備】は、遅れ馳せに馳せ着きしが、賊徒ことぐく破れしかば、まづ柵内に進み入りて、大嵩らにまみえつゝ、盧橘【盧植】が▼△／▼△牒状を、とう出て彼らに見せしめければ、大嵩は玄妙を、まづ労ひて言ひけるは、「おん身はるぐ来給ひて、さこそ疲れ給ひけめ。されど今、賊の輩うち破られて、こと〴〵く、此所を落ち失せたり。わなみつら〳〵思ひ見るに、彼奴らは必ずはながきの、庄に逃げゆき芒角と、一つになりてありぬらん。いと本意なくも思されんが、すぐさまこゝより取つて返し、盧橘に力を添へて、賊徒を追伐し給へかし」と、言はれて玄妙本意なくも、すぐにそのまゝ引き返し、又はながきをさしてゆく程に、向かひの方より数多の人々、罪人と見えて首枷を、掛けたる女子をとり囲み、間近く進み来たりぬ。玄妙は心ともなく、その様をうかゞひ見れば、あに図らんや此人は、すなはち盧橘なりければ、「こは〳〵いかに」と驚き呆れて、近く進みてその由を、問へば涙を流しつゝ、盧橘は語りて言ふやう、「妾久しくはながきにありて、賊婦芒角を取り囲みて、合戦も度々に及びしかど、かの賊婦、妖しき次へ（21ウ・22オ）／続き術を行ひて、様々の、技をなす故ことぐく、いまだ破り得ざりしに、此頃女官豊浦【左豊】といふ者、東の御殿の仰せごとを、うけ給はりてゆくりなく、かの庄に訪ひ来たり、ものにかこつけ『賂を、与へよ』と言ひしかば、妾これに応へ

（21丁裏・22丁表　玄妙ら、盧橘に出会う）

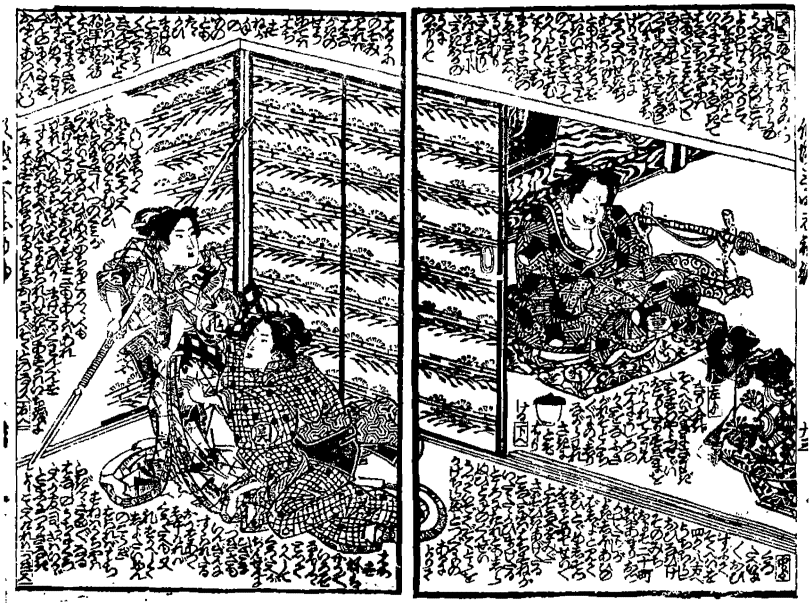
て言ふやう、『軍中最も金銀乏しく、奉ること叶ふまじ』と、言ひしに豊浦はこれよりして、しうねく妾を恨みしかば、遂に東の御殿どのへ、さかしらごとを構へつゝ、董根【董卓】といふ女房を、わなじて身に代はらせ、賊徒を討つの大将として、我が身の事は、悪し様に申しなし、枉げて罪には落としたり。さるから斯くは縄目の恥を、受けて引かれて中へ／下より参るなり」と、聞もあへぬに飛鳥【張飛】が面色、烈火の如く変じつゝ、「我この守護の者どもを、殺し尽くして盧橘の、主を救ひ参らせん」と、ひしめくを玄妙は、忙はしくおし止め、「こは漫ろなり我が妹。彼らはまさしく上へ／中より東の御殿の、仰せごとをうけ給はりたる、人々なれば科もなきに、などてや過ちし給ふぞ」と、言葉忙しく言ひ懲らせば、関路【関羽】はやがて玄妙の、側近く進み寄り、声を潜めて言ひけるは、「橘の刀自図らずも、無実の罪に落ち入り次へ（22ウ・23オ）／続き給へば、これよりの後たれか又、我が姉妹の上を言はんや。しかじこれより故郷に帰り、心を安くせんには」と、言ふに玄妙頷き



（22丁裏・23丁表　玄妙、遠見する）

て、盧橘には様々と、言葉を尽くし慰めて、互ひに別離の涙を流し、遂に袂を分かちけり。

さる程に玄妙は、関路・飛鳥らもろ共に、士卒を率いてふるさとの、桑名を指して帰らんと、進む折からたちまちに、鬨の声聞こへつゝ、馬煙さへ起こりしかば、少し小高き岡の上に、登りて遥かに望み見れば、はながきの庄にては、董根が手の者ども、戦ひ負けぬと思しくて、黄巾の賊徒らは、天公将軍と書きたる旗を、真つ先に進めつゝ、官軍の逃ぐるを追ふて、あはひ〇〇／〇〇間近く見えしかば、玄妙二人の妹に向かひ、「彼らはまさしく芒角が、軍勢と見るは僻目か。勝ち誇りつゝ人もなげに、官軍を追ひ討ちす。さもあらばあれ我々は、彼奴らを討ちなびかし、負けたる官軍を救はずは、あるべからず」と呼ばはれば、関路・飛鳥は一議に及ばず、たちまち馬の鼻押し並べ、賊徒の中へ右へ／左より斬り入れば、賊兵大きに騒ぎ立ち、「すはや伏せ勢起こりたり。隙間を見られて官軍に、後ろの方をな塞がれそ」と、口々に罵りながら、我先にとぞ走りける。下へ／中より玄妙いよ



（23丁裏・24丁表　飛鳥、董根を誅さんとする）

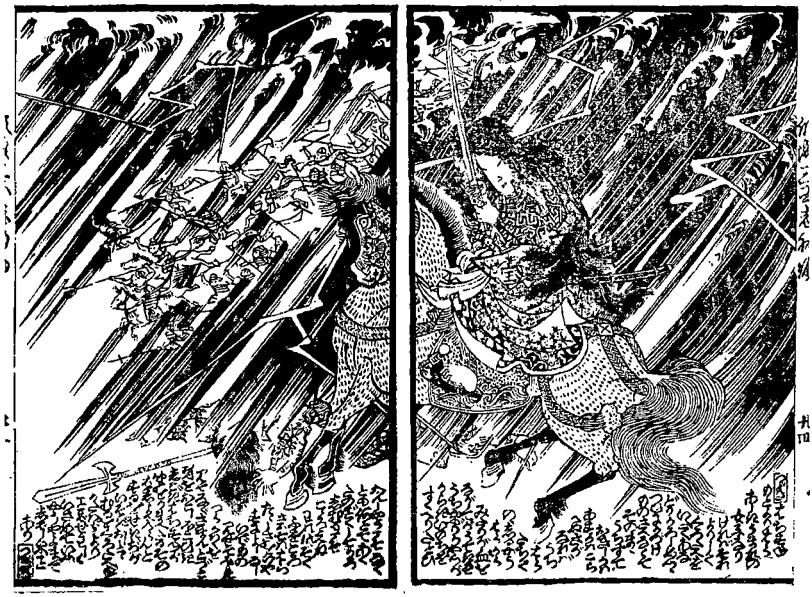
〳〵追ひすがふて、賊兵を四角八方へ、討ち散らし追ひなびけ、その道およそ二十町あまり、追つ駆けたりしがよき潮合ひの、場所と見て追ひとゞめ、士卒をまとめて整斉と、備へを乱さず引き上げたる。

こなたには董根が、いたく戦ひ負けたる所に、「たれとも知らぬ一手の軍勢、討つて出でて賊徒らを、かけ散らしぬ」と告ぐる者、あるによりて董根は、やう〳〵色を直しつゝ、とつて返して玄妙が、陣前に跪き、さも慇懃に救はれたる、恩を厚く謝しければ、玄妙も又礼を返して、初対面の口誼終はれば、董根はうち和らぎつゝ、様々なる話のうちに、玄妙が官司はいかゞと問ふに、司なき由答へければ、次へ（23ウ・24オ）／董根もとより腹悪しき、生まれの女子なりければ、それよりして玄妙を、いたく侮り軽しめつゝ、遂にかづけ物さへなくて、そのまゝうち捨て置きしかば、飛鳥は悇へぬ性なれば、うち腹立ちて罵るやう、「姉妹三人が血を流して、剛敵を討ち破り、彼奴が辛き命を救へり。たとひ恩賞こそなくとも、何とて芥のごとくして、軽しむるこそ心得ね。

我此賊婦を殺さずは、腹立たしさをいやすに由なし。いでもの見せて吠え面かはくを、見てなぐさまん」と、づと身を起こし戟ひきしごき、董根が坐を構へたる、その場所へ入らんとするを、関路が急ぎおし止むるを、玄妙もかたはらより、言葉忙しく諌めて言ふやう、「やよ待てしばし、言ふことあり。次へ（24ウ・25オ）／続き勿論おことが性として、苛立つ癖は常ながら、猛きも事と品とによれり。今董根は東の御殿に、召されて重き官女也。ことさら数多の軍兵、軍馬を、領したる者にしあれば、我々もし彼奴らを、殺さばたちまち謀反人と、○／○称へられんは必定なり。これ掌を指すがごとし。先の諌めも聞かずして、又こりずまに漫ろなる、振る舞ひばし給ふな」と、窘まされて本意なくも、飛鳥は握り固めたる、六の巻へ（25ウ）

（六）

五の巻より拳をさすりて控へたり。玄妙再び言ひけるは、「かゝる所に長居せんより、これより直ちに国見山なる、かの朱根らがもとに行き、彼がひと手に加はるに、しかじ」とその夜用意を調へ、手勢を引き具し朱根が陣に、遂に加はりたりければ、諸勢の喜び大方ならず。玄妙やがて先手に進みて、賊婦七宝が備へに向かへば、賊の大将、高科【高昇】といへる者、手勢と共に斬ってかゝるを、飛鳥はこれと渡り合ひ、矛をひねって二大刀三大刀、撃ち合ふ程もあら心地よや、高科たちまち斬り倒さるれば、味方はこれに鋭気を得て、一度に鬨をつくりかけ、攻め入り攻め入り戦へば、賊の頭領七宝は、丈なる馬にうち跨がり、頭の髪を振り乱し、手には刃をさゝげ持ち、口に呪文を唱ふれば、にはかに雨風吹き荒れて、雷さへおどろ〳〵しく、鳴りはためけば不思議にも、ひとむら立ちし黒雲の、内より人馬夥しく、現れの【▼「い（出）」の誤】でてこなたなる、勢を目掛けて撃ってかゝるに、▽△／▽△官軍大きに驚き騒ぎて、散々に逃げ走る。

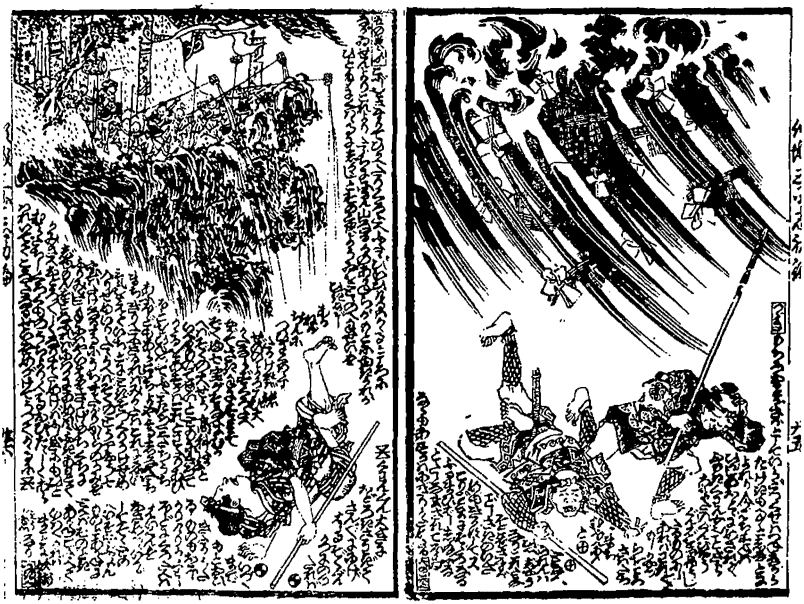


（24丁裏・25丁表　七宝、妖術を用いる）

賊軍勝つに乗りたれば、○／○いづくまでもと追ひ来たり、撃たるゝ者も多かりけり。

かゝりし程に玄妙は、敗軍を収めつゝ、「いかゞして賊徒の兵を、破らんもの」と朱根に問へば、その時朱根答へていはく、「彼はまことに妖術なり。明日はまづ羊・猪の、血をもたらして兵を、あれなる山の頂に、秘かに伏せ置き賊兵の、追ひ来たる時を見合はして、一度にそゝぎ◇◇／◇◇かけさせなば、賊徒は必ず破れぬべし」と、言ふに玄妙その議に従ひ、選りあげたる兵どもに、羊猪の血を用意させ、その他多く穢らはしき、もの数多携へさせ、山の上に伏せ置きて、次の日兵を進めてければ、賊婦七宝は例のごとく、又髪を振り乱し、呪文を唱へけるにより、風雷天地を震ひ動かし、砂を飛ばし石を走らせ、黒雲の内よりは、人馬潮の湧くがごとく、玄妙目がけて撃つて出づれば、玄妙は偽り負けて、もと来し道へひつ返し、馬の足掻きを早めつゝ、後をも見ずして逃げゆけば、賊軍「得たり」と追つかけ来たり、す

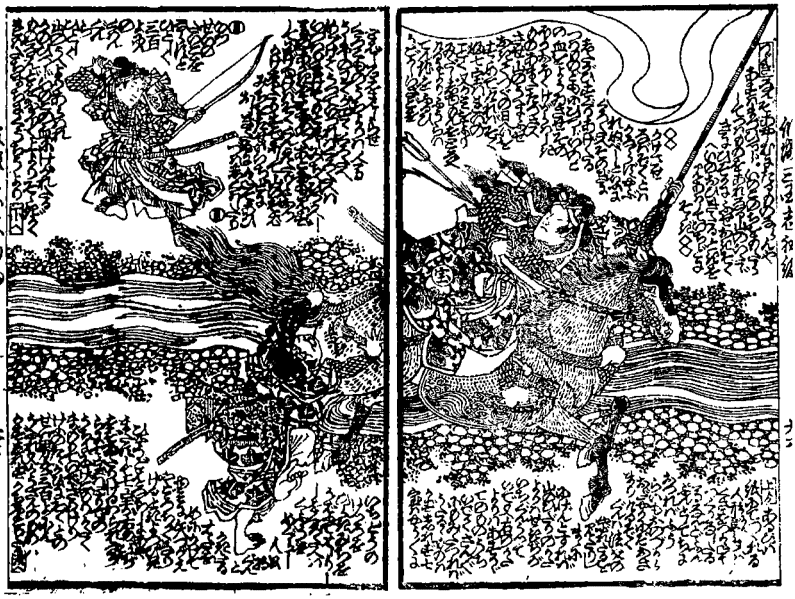
／続き何ぞ怪しむに足るものならんや。次へ（26オ）



（25丁裏・26丁表　官軍、風に悩まされる）

でにして山の岨道を、多勢一度におし来たるに、兼ねて合図はしくはしたり、〇／〇一声の太鼓を鳴らすと等しく、三百余人の官軍ら、等しく山の上より現れ、かの羊猪の、血に穢れたるものなんどを、多く上よりそゝぎかくれば、たちまちに空中より、下へ／上よりあるひは紙にて作れる人形、又は草を束ねて、作りなしたる馬なんど、紛々として地に落つれば、風雷もおのづから、穏やかにぞ収まりける。

賊軍は法の破れたるを、見たりしまゝに逃げんとすれば、山の左の方よりは、関路が一軍撃つて出で、又右の方よりは、飛鳥が手の者撃ち出でて、散々に揉み立つれば、撃たるゝ者は数知れず。七宝はやう〳〵に、一道の血路を開き、道を奪ふて走りしし【▼衍字カ】を、玄妙は工夫をめぐらし、人公将軍と書きたる旗を、目にかけて弓に矢つがえ、矢ごろ近くなりける時、よつ引きひやうど放ちしに、誤たずして七宝が、右の臂をぞ射たりける。射られながらに七宝は、寨の内に逃げ籠り、固く守りて出でざりけり。



（26丁裏・27丁表　玄妙、七宝を射る）

今日の戦ひに賊徒の勢、男女三百余人討たれ、又降参の者数知れず。勝ち誇りたる次へ（26ウ・27オ）／続き官軍ら、続いて塞を取り囲み、息をもつがせず攻めけれども、要害堅固に守りしかば、いまだ落つべきやうもなく、一月余りに及びければ、朱根はすなはち使ひを馳せて、大嵩が籠りゐる、つげ山の寨において、大嵩が賊の大将、梁と戦ふ勝負の、為体を聞かしむるに、使ひはやがてたち帰り、「董根上の仰せを受けて、梁と日久しく、戦ひけれどもことゞく、利なき由を聞こし召され、又大嵩に命ぜられて、董根と■／■代はらしめ給ふ。さるにより大嵩士卒を、引率してうち向かひしに、賊の頭領芒角すでに、天命尽きて死したりければ、妹の梁、姉芒角の亡骸を、貴人高位の礼をもて、厚くこれを葬りけり。又大嵩は新手をひきて、短兵急に攻めかゝり、七度まで戦ひ勝つて、遂に梁をつげ山にて、討ち取りしかば喜び勇み、又かの芒角が塚を暴きて、その首を取り都に上すに、賊の降人に出づる者、あるひは討たれ死せる者、その数挙げて〇／〇知るべからず。此功によりて大嵩は、

（27丁裏・28丁表　甍、七宝を討って降参する）

司位も重く上りて、庄園数多を給ふとぞ。また将門が妹滝夜叉姫【曹操】も、此度の忠戦故に、御殿に召されて官女となり、重き役儀を授けられ、勢ひあり」と語りにければ、朱根はこれをうち聞て、「さらばこの寨をも、早く攻め落として、人々も皆、恩賞に与れよ」とて、総軍等しく力を合はせ、斬れども射れどもことゝもせず、喚き叫んで攻めければ、賊徒らすでに色めき立ちて、すはや今こそ落ちんずと、見ゆる所に、賊婦の内に甍【厳政】といふ者、心変はりやしたりけん、七宝が首を取りて、降参をしたりしかば、朱根はすでに賊徒らの、平らぎたる由都に訴ふ。

されば東の御殿にては、女官らこれを聞届け、「朱根にも恩賞を、賜はるべし」と議する所に、たちまち又大和国より、急を告げて言へるやう、「黄巾の余類にて、鳥飼【趙弘】・水竿【韓忠】・足曳【孫仲】といふ三人の者、百人余りのあふれ者を、語らひ入れて処々方々を、侵しかすむ」と告げこしければ、女官ら再び評議して、「今朱根主立ちたる、賊の頭領を平らげて、その勢多し

（28丁裏・29丁表　朱根の書状、東の御殿に届く）

と聞こえたり。さればそがまゝ朱根が手をもて、今度の賊をも討たしめば、次へ（27ウ・28オ）／続き必ず功を報ずべし」とて、すなはち賊徒追討の、下し文を賜はりしかば、朱根は直ちに大和に至るに、賊の隊長鳥飼は、この由聞くより水竿を出だして、討手の向かふを防がしむ。

〈今騒がしい中ながら、江戸京橋南の方へ、一丁目の四ツ角へ、引移つたとほのかに聞こえし、坂本氏の製法なる、美艶仙女香は薬白粉、美玄香は白髪染め薬。どれもよいとの評判故、東へ飛脚のついでがあらば、沢山取つてもらひませう。

（29オ上部言葉書き）

されば双方の兵ら、互ひに広野に陣を張れば、玄妙は又先手に進み、鼓を鳴らし鬨を作りて、二刻余り戦ひしが、勝敗の色あらはれねば、朱根は自ら精兵を、選りて賊の備へたる、丑寅の方よりして、勢ひ込んで攻めかゝるに、賊兵後ろを塞がれじと、思へば急に引き退く、所を玄妙進み近づき、差し挟みて攻めたりければ、賊兵の

（29丁裏・30丁表　玄妙、朱根に献策する）

討たるゝ者、その数知れず夥し。されば賊徒ら敵はじとて、皆われ先にと寨に逃げ入る。朱根・玄妙らが逞兵は、四方を囲みてその厳しきこと、水も漏らさぬ勢ひなり。

賊兵すでに兵糧尽きて、助けの勢もなきものから、賊長水竿、降参せんと言ひこしけるに、朱根は却つていたく怒り、いよ〳〵ます〳〵攻めたれば、玄妙諫めて言ひけるは、「烏滸がましくは侍れども、妾が言葉をいさゝかも、御身に聞かるゝものならば、喜びこれに増すものなし。昔唐土中へ／上より漢の高祖の、天下を取り得し様を見るに、全く降参の者をよく、用ひられたる故にこそ、人その大度になづみたり。今賊軍降らんことを、望むは物怪の幸ひならずや。御身などてこれらの由を、思ひはかりて水竿らが、降参を許し給はざる」と、故事さへに引き出でて、詰れば朱根はほくそ笑み、「御身が言葉よしといへども、よろしく時勢を察し給へ。これ天の時によるの謂にて、昔は秦の世乱れにければ、項羽がともがら●／●相互ひに、争ひて天が下に、定まれる君なかりき。高祖この故をもて、降れる者はいかなる仇の、

ありとても懐けしなり。今四つの海穏やかに、靡かぬ草もなき世なるに、黄巾の賊徒らのみ、次へ（28ウ・29オ）／続き禍をなす者なり。もしその降参を許しなば、何をもて善を勧めん。彼ら己が、ほしいまゝに悪逆をなして、もし利を失ふその時は、降参なして身を安く、恙なくせんとならば、是仇を長ずるの、道理ならんとぞ思ふなる。妾此ゆゑをもて、根を断ち葉を枯らさんとす」と、弁舌富楼那【▼釈迦の弟子。雄弁で知られる】

（30丁裏　黄巾の余類鳥飼・足曳）

を欺くごとく、説き示されて玄妙は、論ふべきことさへなくて、たちまち服し従ひつゝ、又改めて言ふやうは、「今この寨を四面より、厳しく囲み一人も余さず、討たんと欲せば彼らは必ず、心を一致にして必死の戦ひを、なさんとこそ■／■図るべけれ。人一途に志を、固めたる力に向かひて、戦はんとせば味方にも、若干人を滅ぼすべし。多勢の敵を攻むるには、必ず開いて攻むるに利ありと、兼ねて聞伝へ侍りにき。その逃ぐる時追ひ撃ちして、勝つことを図らんは、いかにあらん」と勧めしかば、朱根は「げにも」とこれに従ひ、辰巳の方の囲みを緩め、戌亥の方より攻めたりしかば、案のごとくに賊徒の大勢、辰巳の方より我先にと、前後を争ひ逃げ走る。朱根・玄妙士卒に下知して、勢ひに乗り追ひ撃たしむれば、逸りきつたる若者ら、追つかけ〳〵散々に、攻めつけられて賊将水竿も、次へ（29ウ・30オ）／続きすでに朱根に射殺さる。

かゝる所に鳥飼・足曳、大勢を引いて馳せ来たり、追ひ来る官軍をさゝへつゝ、火花を散らして戦ふたり。朱

根は賊徒の多勢なるを、見たれば少し引き退かんとするに、賊軍たちまち鋭気を得て、潮の湧くがごとくに進みて、再びもとの寨をば、奪ひ返しつ官軍をも、若干討ち取りたりければ、官軍もこれよりして、その間十町ばかりも、引き退きて陣を取り、しばらく息を休めける。

その日の黄昏ごろなりけん、東の方より一群の女軍、こなたを指して馳せ来たり、大将と思しきが、真っ先に進みたり。○／○これはそもいかなる女と、その姓名を尋ぬるに、伊与の国の住人藤原良範が妻、堅田【孫堅】といふ者にて、伊与の大掾純友【孫夫人】らが、母にして女ながらも、雄々しき生まれなりければ、此度鈴鹿の芒角らが、起こりしことをうち聞いて、家来数多を率いつゝ、こゝに来たりて官軍らに、うち交じらひてもろ共に、力を合はせなんと言ふ。朱根は七の巻へ（30ウ）

▼第三冊の奥目録（「文政十三年寅春新彫目録」）は、第一冊と同じ。前回（本誌第五〇四号）二三頁下段参照。

《第四冊　表紙》

傾城三国志初編　下帙巻之下
雪麿作　国貞画
庚寅新刊
張飛【▼駒絵内。中央は飛鳥】

《第四冊　前表紙見返し》

三国志　下帙下巻
雪麿作　国貞画
寅春　佐野喜版

（七）

六の巻より此由聞くと等しく、喜び面に表はれて、やがて堅田を敵陣の、南の門より攻めかゝらせ、又大桑の玄妙をば、北の門に向かはしめ、自ら西の門に進みて、わざと東の方、只一方を開け置きたり。これは是、敵の心を必死になさで、逃ぐる心のある者は、心安く逃げよかしと、言はぬばかりにかく図りし也。

さる程に堅田は、馬にも乗らず徒歩にして、敵陣近く進み寄り、さも安らかに堀を越え、城の内へ乗り入るに、

（31丁表　堅田、鳥飼を斬る）

敵の方にはかくと見るより、これを討たんと兵ら、右へ／左よりひし〳〵とおつ取り囲み、堅田を中に取り巻いたり。堅田はにつことうち笑ひ、刀を抜いて閃かし、目の当たりに五六人の、敵を○○／○○手軽く斬り倒し、残る勢をば八方へ、追ひ靡けたる働きは、目覚ましくこそ見えにけり。賊婦鳥飼これを見て、大きに怒りまつしぐらに、馬を飛ばして次へ（31オ）／続き槍とりのべ、突いてかゝるを事ともせず、堅田はすかさず槍の穂先を、鎧の袖に受けとゞめ、身を躍らしてつけ入りつゝ、鳥飼が、利腕をむづと捕らへて、持つたる槍をこなたへ奪ひ、おつ取り直してそのまゝに、鳥飼を突き殺し、又その馬にうち乗つて、渦巻き群がる大勢の、中におめいて駆け入り踏み込み、左になぎ立て右に突きたて、間なく隙なく駆け巡り、勇を振るふて戦ふたり。賊婦足曳悌へかねて、北の門より逃げ出づれば、玄妙急ぎ追ひかけて、弓に矢をはげ只ひと矢に、足曳を射て落とせしかば、官軍どもは勝つに乗つて、皆われ先にと城中に、攻め入り〳〵討ち取る首は、なか〳〵数へも尽くされず。

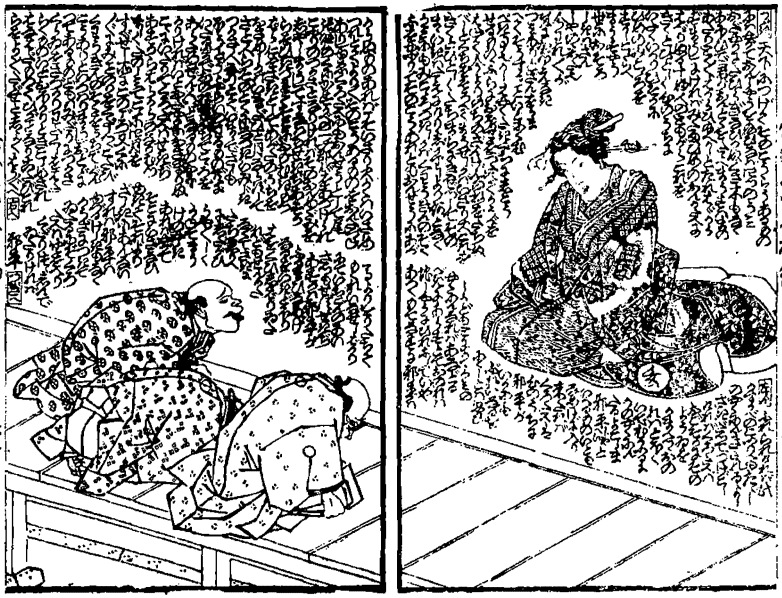
（31丁裏・32丁表　玄妙、漁火に出会う）

かゝりし程に大和の国の、諸郡ことゞく平らぎければ、朱根はそれより都に帰りて、恩賞厚く賜はりぬ。さて又堅田も御殿には、秘かに伝手のあるにより、殊に恩賞厚くして、重き位に上りしが、それに引き替え玄妙のみ、恩賞の沙汰なかりしかば、とにかく心鬱々と、楽しからねば籠りゐしが、ある時鬱気を散ぜんため、近きわたりをそこゝと、そゞろ歩きをしてけるに、図らず東の御殿に仕ふる、采女なりける漁火【張均】と、いふ女房に出で会ひぬ。話のついでに玄妙は、我が身この度黄巾の、賊婦らを右の中へ／左より平らげつゝ、人にも増して大いなる、勲功はありながら、恩賞かってあらざる旨を、うち嘆き物語りしに、漁火大きにうち驚き、まづ玄妙を様々に、言ひ慰めてたち別れ、己は急ぎ参内し、奏聞して申すやう、「近頃下へ／中より黄巾の、賊婦どもしきりに起こりて、処々方々を侵しかすめし、その源を尋ぬるに、常に姫が傍らに、侍りぬる十婦人【十常侍】の、ともがら君を欺きて、人の賂を貪りては、功なきにも官禄を、重く与へて喜ばしめ、また賂を与へぬ者

には、罪なきをさへ官を落として、その心を愁へしむ。この故をもて世の中の、人の心背きつゝ、しきりに上を恨むるものから、天下の乱を釀せし也。とく十婦人のともがらが、頭を刎ねて一々に、四条河原にかけ並べ、あまねくこれを次へ（31ウ・32オ）／続き天下に告げて、その功労ある者には、やがて恩賞を賜ひなば、四つの海穏やかに、平らぎ靡かぬ草木もなく、仰ひで君が恩徳を、讃へ申すは目の当たり。とく〳〵計らひ給へかし」と、たれ憚らず申しにければ、御霊姫【後漢霊帝】の御かたへに、侍りぬる十婦人の、ともがらこれを聞くと等しく、心の内にいたく怒り、秘かに姫の御心を、すかしこしらへ申すやう、「世に恐ろしきは讒者の舌也。今我々が、身に覚えなき罪ありと、讒を構へて奏すること、いと憎むべき事也かし。早く滝口に伺候せる、武士らに仰せを伝へて、頭を刎ねて今より後の、讒言の根を断ちぬべし」と、口を揃へて申せしかば、漁火これを聞くと等しく、たちまちに気絶して、そのまゝ息は絶えにけり。

しかりしより何となく、上にも御心つきしかば、「黄巾の賊婦を破りて、その功あれども恩賞に、与らぬ者あればこそ、漁火かくは諫めつれ」とて、より〳〵その功ある者を、おん尋ねありし故、玄妙にも恩賞として、尾張の国春日部の、一郡を預けられ、郡の司となりければ、その御恵みを謝し申して、すなはち関路・飛鳥らを、引き連れてそこに赴き、専ら仁を先として、県の内を治めしかば、いまだひと月ならずして、里人らその徳に懐き、いみじき司人なりとて、今までさしも放蕩無頼の、悪者共に至るまで、己を恥じて心を改め、善人となる者多かりければ、いと穏やかに治まりぬ。

こゝに至りて玄妙は、関路・飛鳥ら姉妹の【▼「と」の誤カ】、仲睦ましく楽しみて、こゝに四月を過ぐせし所に、この頃又国々に、勅を下しつゝ、此度黄巾の賊を討ちて、軍功ありと偽り申し、御殿に伝手ある者どもは、みだりに司位を授かり、私を働く者、いと多かりと聞こし召され、「はなはだもつて僻事なり。此度これらをよく〳〵質せ」と、処々方々へ右へ／左より触れられければ、此春日部の郡へも、質しの役人来たれる由、



（32丁裏・33丁表　玄妙、春日部に赴任）

先だつて告げこしければ、玄妙は厳かに、その用意を構へつゝ、己は遠く出で迎ふるに、かの役人たる、よこしま邪平【督郵】といへる者、いとも無礼げに入り来たれば、玄妙は心の内に、邪平がいかにも無礼なるを、憎しとは思ひしかども、「とにかく上の役人なれば、侮るべきにあらず」とて、己は地上にひれ伏して、礼厚くもてなすに、邪平は馬より降りたちて、目礼なせしばかりにて、一言の挨拶もせず。関路・飛鳥は邪平が振る舞ひ、無礼げなるを憤り、歯を食ひしばりゐたれども、せん方なくて先に立ち、しりへに従ひうや〳〵しく、兼ねて設けの屋敷あれば、やがてそこに誘ひゆきて、それより座敷に案内すれば、邪平は譲る気色もなく、高座に着きてゐたるにぞ、玄妙は坐をへりくだり、謹んでゐたりければ、邪平次へ（32ウ・33オ）／続き問ふて言へるやう、「そも〳〵汝は、何者の子孫にて、また何らの事ありて、当所の司とはなりたる。その来歴を語るべし」と、言ふに玄妙答へて言ふやう、「妾はもと、伊勢国桑名の郡、桑村の者なるが、先祖は禁庭に由縁ある、殿上人にて候

（33丁裏・34丁表　邪平来たる）

ひしが、近き頃は落ちぶれて、賤しき土民となり下りぬ。しかるに此度図らずも、黄巾の賊を討ち平らげ、三十余度の戦ひに、いさゝか功労ありしかば、ゆくりなくも当所の長と、せさ【▼「せ」脱カ】給ふもこれ全く、かしこき君のおん恵みと、ひとへに天恩の忝さは、ありがたきまでに侍るかし」と、言はせもあへずよこしま邪平、眼を怒らし罵るやう、「こは烏滸なるものゝ言ひ条かな。汝がごとき賤の女の、何とて禁庭に由縁あらんや。しかも偽りて功もなきに、みだりにかゝる司位を、盗める故に御殿より、やつがれに勅命ありて、これらを沙汰し質させ給ふ。無益の口をな叩きそ」と、以ての外なる返答に、玄妙呆れてしばしが程、黙然としてゐたりしが、その場は故なく退きて、下司なる庄官らを、そば近く招き寄せ、「邪平がしか〳〵の振る舞ひして、すこぶる権威を振るひつゝ、人を脅すはいかなる▼▼／▼▼故ぞ。汝らこれを知りたるや」と、問ふに皆々答へていはく、「これ全く賂を、取らんが為に右へ／左よりするわざにて、他に子細は候はじ」と、口を揃へて答ふるにぞ、玄妙は「いか

（34丁裏・35丁表　邪平、三姉妹を叱責する）

にもさなり」と、思ひしかども庄官に、■／■己が心を告げて言ふやう、「すでに妾里人らを、治めながら露ばかりも、彼らが上を侵すことなし。いかでか邪平のともがらに、賂する貯へあらんや。かの人たとへ悪し様に、妾が上を計らふとも、もとより賄賂の心なし」と、遂に与へざりければ、その次の日によこしま邪平は、賂なきを憤り、庄官らを召し集へて、是非を言はさず脅しかけて、玄妙みだりに百姓ばらを、害するといふ訴へ状を、書してこれを懐へ、秘かに納めてゐたりけり。

さることありとも知らざれば、玄妙は何心なく、邪平が宿る屋敷に至り、門を入らんとしたる時、門番の僕これを支えて、かつて内に入れざれば、玄妙はふつにその心を得ねど、次へ（33ウ・34オ）／続き僕らと、争ひてその子細を、問ひあきらめてもあからさまに、いかでか言ふべきと思ひしかば、せん術なくていたづらに、問ひも質さでたち帰り、とにかく心安からず、もの思ひしてゐたりけり。

此日飛鳥は外へ出でて、用事を足せし帰り道、少しく

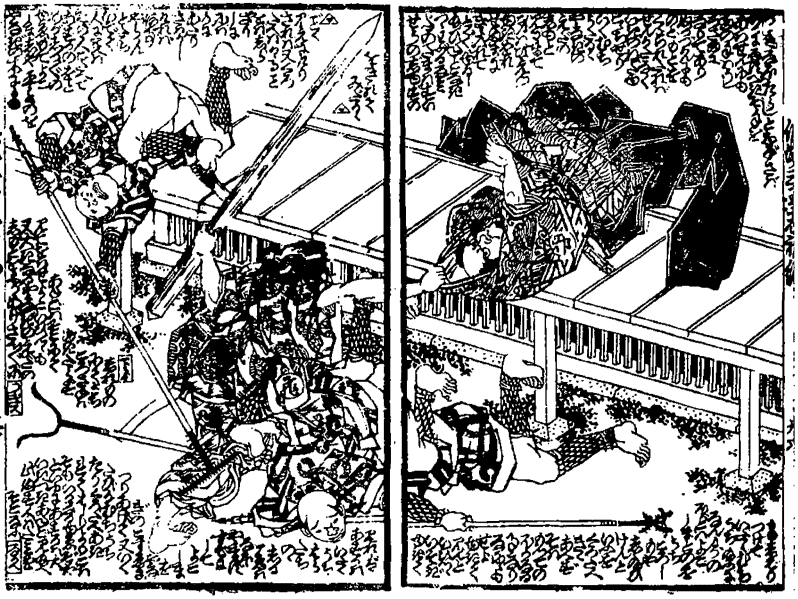
酒に酔ひはしつ、心のどけく楽しくて、邪平が宿りし屋敷の前を、一人よろ〳〵ひよろ〳〵と、よぎれる折節年老ひたる、百姓ばら五六人、左へ／右よりかの門前に何やらん、ぶつ〳〵と呟きつゝ、各々いたく悲しみゐたり。飛鳥はこれを訝しく、思へばそばへ立ち寄りて、「いかなる故にて嘆くや」と、問へば百姓右の下へ／左の上よりあたりを見返り、秘かに囁き告ぐるやう、「昨日来ませしお役人の、よこしま主はその性よからぬ、御方にて

（35丁裏　邪平、木介に訴状を書かせる）

ありけるにや、我がともがらのお頭なる、玄妙の刀自より賂を、貪り取らんと欲せしかども、お頭かってその事なければ、心秘かに憤り、庄官木介男【県吏】を召し寄せ、しか〴〵の訴へ状を、書かしめてこれをもて、東の御殿に訴へ申す、さかしら事を構へつゝ、玄妙の刀自を罪に落とさん、底企みにて候へば、我々こゝに来たりつゝ、お頭の私なく、次へ（34ウ・35オ）／続き我々を撫育し給ふ、恩徳の程をあらはして、いかで彼のさかしら事を、止めさすべきと思へども、門番の人々我々を、遮り止めて門内へ、入れぬのみかは散々に、我がともがらを打ち懲らしぬ」と、言ひつゝ瞼をおし拭へば、飛鳥はこれを聞くよりも、たちまち面色火のごとく、牙を噛んで憤り、もとより酒に酔ひてはをり、いかでかちつとも怺ゆべき、屋敷の門に走り入れば、番の者ども大勢たち出で、遮り止めて入れじとするを、飛鳥はもろ肌おし脱ぎて、「邪魔ひろぐな」と握り固めし、拳をもつて散々に、うち散らし追ひのけて、やがて館に入りて見れば、よこしま邪平は上座に、おし直りつゝ庄官を、さま〴〵

と責めゐたるに、飛鳥はその音雷の、轟くごとき声ふりたて、「やをれ民を害ふ逆賊、そこな立ちそ」と息巻き荒く、呼ばゝりかけて睨みたる、眼の光すさまじければ、思ひがけなき中へ／上よりよこしまは、驚き慌てて身の周りに、ありあふ者に声をかけて、「あれ搦めよ」と下知すれば、「畏まりつ」と応へもあへず、立ちかゝつたる数多の者ども、飛鳥はこれをことゝもせず、力足を踏みしめ〳〵、近付く奴ばら張りのけ蹴のけ、飛びかゝつてよこしまが、髻掴んで宙にひつ提げ、「憎き痴れ者よくぞこの、県に来たりて腹一杯、我がまゝ下へ／中より ひろぐ身知らずめ。仕方あり」とて門外へ、引きづり出だして傍らなる、いと大きなる柳の木へ、高手小手に括り上げ、柳の下枝折り取りて、邪平が腿より尻こぶたの、八の巻へ（35ウ）

（36丁表　飛鳥、百姓の嘆きを聞く）



（36丁裏・37丁表　飛鳥、邪平の屋敷を襲う）

（八）

七の巻より あたりを続けて二百ばかりも、◆／◆鞭打たれたる痛みに堪へねば、よこしまが、髭首反らせし男の子の身をもて、大声あげて泣き叫び、「やよ姉御よ許してたべ。やつがれ当所へ入り来たり、横様なる心もて、すでに御身をはじめとして、▲▲／▲▲里人らにも若干の、難義をかけんとなしたるは、もとより我らが僻事にて、後悔こゝにたちがたかり。向後をきと慎むべきに、御身菩薩の心あらば、なほゆりがたき罪科も、愚痴蒙昧の凡俗なりと、長き目菩薩に見そなはして、助け給へや救ひてよ。此詫び言も 次へ（36オ）／ 続き なほ足らじと、思さばいかになすべきぞ、手を合はせんにも両の手は、後ろさまになりてあり。額づかんにも喉元を、括られたればせん方なく、息の根絶ゆ【▼「る」脱カ】心地せり。いく鞭打たるゝ柳の枝の、しもと【▼「笞」に「霜」を効かせる】見るまで身は冷えつ。雪折れせぬ間に聞入れて、とく〳〵許し給ひね」と、泣きつゝ詫ぶる涙の玉は、水晶の数珠の緒切れて、乱るゝ△／△ごとく見えにけり。

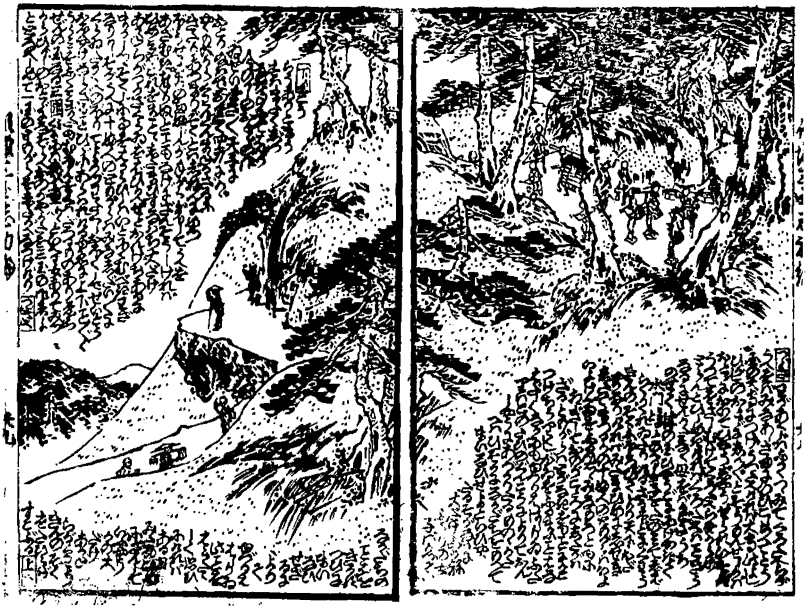
（37丁裏・38丁表　飛鳥、邪平を鞭打つ）

されば又玄妙は、かゝる事をば知らざりしに、にはかにあたり騒がしければ、「何事やらん」と立ち出でて、人に問へばその人答へて、「飛鳥の乙女がしか〴〵の、故もてよこしま邪平殿を、柳の木に●●／●●縛り付けて、いたく鞭打ち給ふになん。今の程はよこしま殿を、打ち殺しもやし給ひけん」と、言ふを玄妙聞あへず、「そは以ての外なる事なり。何にもせよゆきて見ん」と、言ひつゝ急ぎゆきて見れば、飛鳥はいたくうち腹立ち、罵る声はなほ止まず、すでにしてよこしまを、柳のこずゑに吊り上げて、又いく度か鞭打ちたり。玄妙呆れて走り寄り、「こはそもいかなる故ぞや」と、言ふに飛鳥は大息つき、「姉御見給へ此盗人は、民を害ふ中へ／下より痴れ者にて、打ち殺さねば飽き足らず。姉御はそこにて見てをはせよ」と、言ひつゝも又大きなる、柳の枝の笞を振り上げ、散々に次へ（36ウ・37オ）／続き打ちすゆれば、邪平は息も絶え〴〵に、少し瞼を開き見れば、傍らに玄妙が、いつしかたゞすみゐたりければ、いと苦しげなる声をかけて、「玄妙の刀自願はくは、我が一命を救

ひ給へ」と、言ふ声もはや枯れ〳〵也。玄妙その性慈悲深き、女子なれば見るに忍びず、かつ「此者を打ち殺しなば、後日の咎めいかゞあらん」と、深くも思ひめぐらしつ、急ぎ飛鳥をおし止むる、折から関路も馳せ来たり、玄妙に言ひけるは、中へ／右より「姉さま御身は先つ頃、莫大の勲功ありて、すでに一郡の司とまで、なり給へるにゆくりなく、此奴がために侮られ、無礼は言はん方もなし。妾つら〳〵思ひみるに、草むらの内は鳳凰の、住むによしなき所ぞかし。いさゝかなる此所のごときは、いやしくも我が姉妹の、住みつくべき所にあらず。今此邪平を刑罰して、速やかに故郷なる、桑名に帰りて別に又、大なるはかりごとを、巡らすにしくことあらじ」と、言葉忙しく勧むれば、玄妙これに従ひて、郡の司となりたるはじめに、上より預けられたる所の、割り符をかねて懐に、袋に入れて納めしが、件の袋の紐を解きて、邪平が首にこれを掛け、「己はいたく民を害ふ、無道人のことにしあれば、今幸ひに下へ／左の上より首を刎ねて、民の害を除かめと、思へ共又妾が心に、忍びざる所もあれば、辛き命を助くるなり。よりてわなみは司をも、禄をも捨てて故郷に帰れり。命冥加な男の子や」と、言ひ捨てゝ関路・飛鳥らと、共に数多の士卒を従へ、故郷桑名へ帰りける。

また此方には百姓ばら、寄り集まりてよこしま邪平を、柳の上より下ろしつゝ、仇を恩にて様々と、労り介抱なしければ、邪平やう〳〵我に返りて、喜ぶ事大方ならず。それより邪平は次へ（37ウ・38オ）／続き我が悪事は、深く包みて玄妙らが、上をば皆悪し様に、言ひこしらへて当国の、大守に告げ訴へければ、大守此由東の御殿に、しか〳〵と奏聞せしかば、御殿において評定せられ、「急ぎ討手を差し向けて、玄妙らを搦めとらん」と、ひしめきければ玄妙は、事急なるにせん方なく、母をば駕籠にうち乗せて、津の国兵庫に逃げゆきて、水門【劉恢】といへる女子を頼みて、しばらく隠れゐたりける。

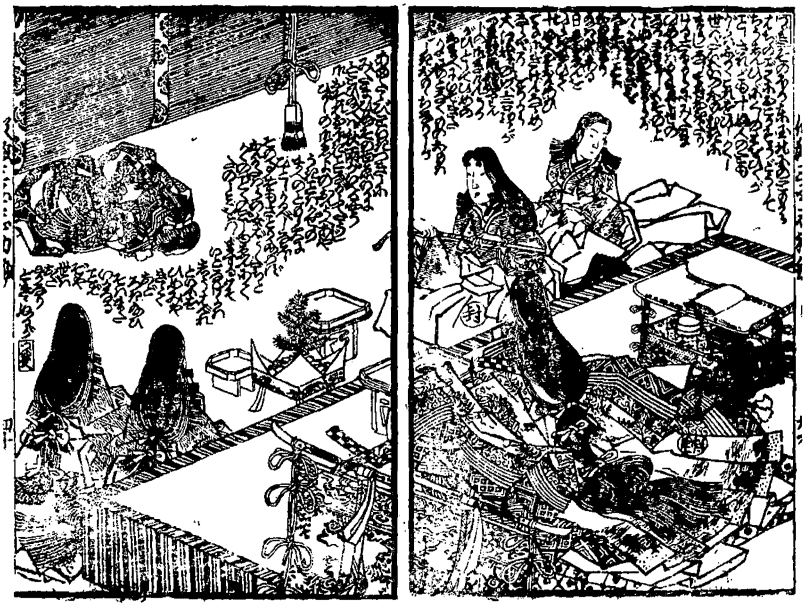
さる程に、黄巾の賊婦滅びてより、天下穏やかなりければ、御霊姫に咫尺し奉る、かの十婦人のともがらは、いよいよ権威を振るひつゝ、皆もろ共に相議して、おの



（38丁裏・39丁表　玄妙ら、兵庫へ向かう）

が心に従はざる、輩は科なきをも、ことに託け誅戮し、我意を振る舞ふこと甚だしく、中にも譲葉【張譲】・走井【趙忠】二人はこの度の、軍功によりて恩賞に、与りたるものゝ方へは、秘かに仲立ちをもつて、賂せよと言ひやりたる、そが中に、大嵩・朱根二人の女子は、かつて仲立ちの言葉を聞かず、遂に賂せざるによりて、譲葉・走井此事を、腹立しく思ひにければ、ある日御霊姫に讒して言ふやう、「かの大嵩・朱根らが、黄巾の賊を平らげ、すこぶる上へ／下より功労ありと申すは、全く実なき事にて侍り。今東の御殿の御威勢、をさ〳〵天子に劣り給はで、恩徳四方に輝くものから、官軍招かざるに来たり集まり、賊徒は自然に滅亡せしを、かの両婦人が手柄顔して、上を欺き奉りぬ」と、事もなげに讒奏しければ、姫宮これをまことゝし給ひ、すなはち「大嵩・朱根らが、司位を奪ひ返せ」と、おん下知あるに任しつゝ、即時に事を計らひしは、いと憎むべき業なりかし。

そが上に十婦人の、ともがらはみな次第々々に、位高く経上りて、よろづ私多くして、政道公ならざること、



（39丁裏・40丁表　秋雨、御霊姫に対面）

日々に顕れける故に、上下ことゞく恨みを含み、また
も謀反を企つる者あり。越前国なる三国には、幾重
【張挙】といへる女ありて、自ら東の御殿になぞらへ、
己が館を三国の御所と、称へしめて一国の、ともがらを
従へ懐けけり。次へ（38ウ・39オ）／続きその他東国・
北国のともがら、蜂のごとくに起こり、騒動して注進日々
に、櫛の歯を挽くがごとし。されども十婦人のともが
らは、深くこれを秘し隠し、世は太平の趣に、申しなし
てぞ置きたりける。

さるからに御霊姫には、かくまで世の中騒がしく、そ
の上十婦人の輩が、かゝる仕業をなすべしとは、思ひ寄
り給はねば、ある日酒宴を開き給ひて、十婦人を御相手
に、御機嫌斜めならざりし、折から大江の以言が妻秋雨
【劉陶】、臨時の御機嫌伺ひとして、姫の御前に出で来た
りて、何となくもの思はしき、面持ちなりしが数多度、
吐息つきしに御霊姫、「その故いかに」と問ひ給へば、
秋雨が言へるやう、「御畏れ多きことながら、当時東の
御所の御上、危うきことは風の前の、灯火に等しかるべ

し。なほその事をも悟り給はず、御傍らの女房たちと、かくのごとくの御酒宴にて、楽しみをはしまするこそ、いと嘆かはしう侍れ」と言ふを、姫宮聞て驚き給ひ、「そはまたいかなる言葉ぞや。世は穏やかなりと聞ぬるが、次へ（39ウ・40オ）／続きいかなる危ふきことやある、聞かまほし」と宣へば、秋雨膝をおし進め、「姫上知ろし召されずや。もと此御所は伯父君、時平の大臣の御威勢ゆへ、かくまで栄へおはすなり。されば東の御殿の仰せは、憚り多くも禁庭の、詔より人みな恐れぬ。さるあいだ上にては、いよ〳〵下を憐れみ思して、よろづ仁義を先だてて、事を計らひ世の人を、懐け給ふを第一と、せさせ給ふぞ願はしきに、さはなくして権威に任せ、人の愁ひも御顧み、なき故に人背きて、より〳〵謀反のともがらありて、館を傾け申さんと、図る者いと多し。その禍の水上は、常々姫の傍らに、侍りて傅き奉る、かの十婦人の所為にして、かの女房ら権威に任せ、人を害ひ苦しむるに、よりて少しも徳ある者は、宮仕へを辞し去りて、影を隠して再び出でず。只侍人のみはびこり侍りて、禍目の前に候」と、憚る色なく奏しけり。

これより後の物語は、来春二編に著すべし。見る人発兌の時を待ちね。めでたし〳〵。

五渡亭国貞画　墨川亭雪麿作　浄書谷金川

（40丁裏　秋雨、御霊姫に諫言する）

▼第四冊の奥目録（「文政十三年庚寅孟春新梓」）は、第二冊と同じ。前回三八頁下段参照。

（かんだ・まさゆき　法学部准教授）